

19世紀後期オーストラリアの社会

—労働者のパラダイスか否か—

原 剛

19世紀と20世紀の交に「オーストラリアは労働者のパラダイス」という言葉が、皮肉な表現としてでなく、真の意味をこめてよく言われた、とラッセル・ウードは述べ⁽¹⁾、N.G. バトリンも、19世紀後半のオーストラリアは南海のパラダイスを彷彿させるものであったと書いている⁽²⁾。もちろんこのような表現に対しては、反対の論者もあり、ウードはそのひとりであるが、最近にも、資本主義社会における社会制度のもとでは、オーストラリアは労働者にとってパラダイスではなかったという主張の書物が刊行された⁽³⁾。本稿はオーストラリアの都市社会にとってどれほど住みよかったかを見ようとするものである。

1. 住宅階級の存在

19世紀末のオーストラリアは、N.G. バトリンによれば、人口の約3分の2が都市部に住んでいたので、当時の世界で最も都市化したところであり⁽⁴⁾、A.F. Weberによれば世界第3の最も都市化した社会であった⁽⁵⁾。もっとも1890年のニュー・サウス・ウェイルズ（以後 N.S.W. と略記）植民地政府統計で都市部とされたのは人口500人以上の町であり、都市化の程度が誇張された傾向がある⁽⁶⁾。しかし都市部をそういったものとしても、1891年に6植民地の首府に全人

(1) Russel Ward, *The History of Australia, The Twentieth Century 1901—1975* (London 1978), p. 4.

(2) N.G. Butlin, 'Long-Run Trends in Australian per capita Consumption' in Keith Hancock (ed.), *The National Income and Social Welfare* (Melbourne 1965), p. 8.

(3) Ken Buckley and Ted Wheelwright, *No paradise for Workers, Capitalism and the Common People in Australia 1788—1914* (Melbourne 1988).

(4) N.G. Butlin, *Investment in Australian Economic Development 1861—1900* (Cambridge 1964), p. 181.

(5) A.F. Weber, *The Growth of Cities in the Nineteenth Century* (New York 1889), p. 144.

(6) J.W. McCarty, 'Australian Capital Cities in the Nineteenth Century', *Australian Economic History Review* (以下 A.E.H.R. と略記) vol. 10, no. 2, (1970), p. 112.

アメリカ合衆国では1870年は住民が800人以上の市や町を都市とし、1906年刊行の Supplementary Analysis of the Twelfth Census から、人口2500人以上の地区を都市としている。U.S. Department of Commerce, *Historical Statistics of the U.S.A.* 齊藤・鳥井監訳『アメリカ歴史統計・合衆国商務省編』（原書房 1987年）。p. 2.

表 1 オーストラリアの各植民地の首府人口が、各植民地人口中に占めた比率

	Melbourne	Sydney	Adelaide	Brisbane	Perth	Hobart
1851……	38	28	28	—	—	—
1861……	23	27	28	20	33	28
1871……	26	27	27	13	—	25
1881……	31	30	33	14	30	23
1891……	41	35	36	24	32	22
1901……	40	37	39	24	33	20
1911……	45	47	41	23	38	21

Source: *Commonwealth Year Books*.

J. W. MaCarty, 'Australian Capital Cities in the Nineteenth Century', *Australian Economic History Review*, vol. x na 2. Sept. 1970, p. 121

口の3分の1強が住んでいたのであるから(表1),都市が19世紀後期のオーストラリアの社会・経済に重要な位置を占めたことに疑いはない。この19世紀におけるオーストラリアの都市発展の特徴は、都市化が地方への定住に先行し、後背地の産業発展に大きな影響を与えるという側面をもったことである。この点で、産業革命期イギリスの都市化が工業化によって誘発され、工業化が都市の成長率とその社会・経済的構造とを規定したのとは大いに異なっている。オーストラリアでは、特に19世紀中葉までは、都市がまず移民の根拠地および商業都市として発展し、都市の成長が後背地の産業の発展に影響を与えた。後背地の産業が成長を開始すれば、今度は産業が都市成長を促進することもあり得たのは言うまでもない。このように都市化が経済の従属変数であったばかりでなく独立変数の性質をも強くもっていたことが、19世紀オーストラリアの都市発展の過程がイギリスの近代都市発展の過程と異なった特徴である⁽⁷⁾。

オーストラリアの都市のなかで19世紀末に最大の人口を擁したメルボルンとイギリスの都市とを比較した場合に見られたオーストラリアの都市のもうひとつの特徴は、メルボルンではイギリスほど差別的居住形態が顕著でなかったことであると言われている⁽⁸⁾。もちろんメルボルンでも、時の経過と共に各時期の価値体系において高く評価された土地に富裕な人々が集まり、低い評価の土地に資力の乏しい人々が集まって、おのずから中層の人々の多い住宅地と労働者たちが多く住む地区とが形成されたであろう。また鉄道の建設に伴って、高い運賃や筋肉労働者の始業時間に間に合わない列車時刻表が、少なくとも19世紀の間は労働者の居住地を制限して(表2—4)⁽⁹⁾、産業公害のない健康的な郊外は比較的高所得の人々の居住地となり、工場や作業場に近い市内は労働者の居住地となる傾向を示して、中層の人々が「スラム」と呼んだところも出現した⁽¹⁰⁾。

(7) Sean Glynn, 'Approaches to Urban History: The Case for Caution', *A. E. H. R.*, vol. 10, no. 2, pp. 222-3.

(8) Graeme Davison, 'Public Utilities and the Expansion of Melbourne in the 1880s', *A. E. H. R.*, vol. 10, no. 2, p. 170.

(9) A. J. C. Mayne, 'Commuter Travel and Class Mobility in Sydney, 1858-88', *A. E. H. R.*, vol. 21, no. 1, (1981), pp. 56-9.

(10) *Ibid.*, p. 64.

表 2 片道2等運賃(ペンス)

年	シドニーからの距離(マイル)					
	2	3	5	7	8	14
1958	6	9	15	21	24	42
1864	3	6	9	12	15	24
1868	3	5	8	10	12	18
1874	3	5	8	10	12	18
1878	2	3	5	7	8	13
1884	2	3	4	6	6	10
1888	2	3	5	6	7	11

Source: Supplements to N. S. W. Government Gazette

表 3 労働者割引過ぎめ運賃(ペンス)

Sydney より	Paramatta 鉄道 1881—88年		Illawarra 鉄道 1886—88年		
Eveleigh	(1)	9	Eveleigh	(1)	9
Macdonaldtown	(2)	10	Erskineville	(2)	12
Newtown	(2)	12	St Peters	(2)	12
Stanmore	(3)	15	Marrickville	(3)	18
Petersham	(3)	18	Tempe	(4)	21
Iewisham	(4)	21	Arncliffe	(5)	24
Summer Hill	(4)	21	Rockdale	(6)	26
Ashfield	(5)	24	Kogarah	(7)	28
Croydon	(6)	26	Hurstville	(9)	36
Burwood	(7)	28			
Strathfield	(7)	30			
Homebush	(8)	33			
Rookwood	(10)	36			
Auburn	(11½)	40			
Granville	(13)	42			
Parramatta	(14)	45			

() 内の数字はシドニーからの距離(マイル)

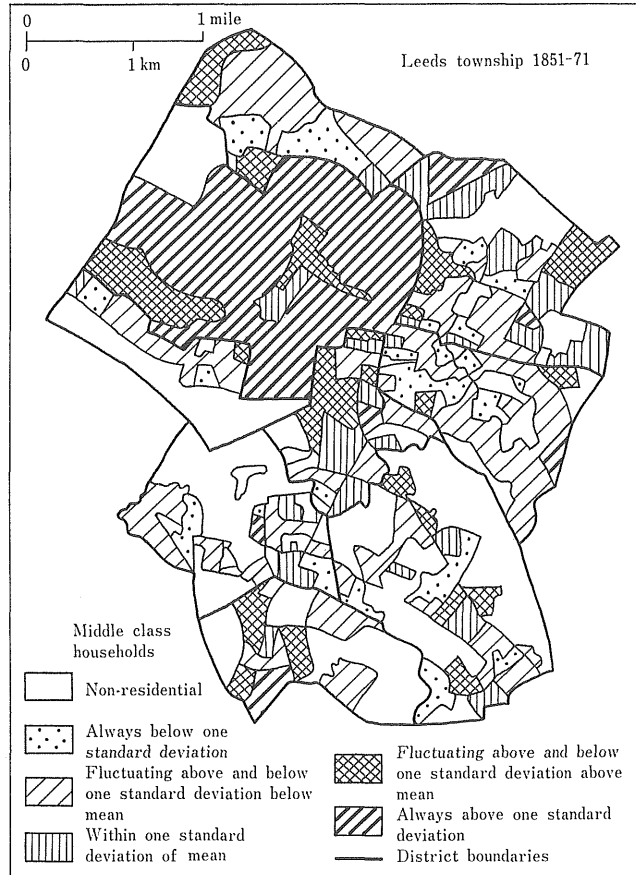
Source: Supplements to N. S. W. Government Gazette

表 4 平日の旅客普通列車運行本数

年	Paramatta 鉄道							Illawarra 鉄道	
	1858	1864	1868	1873	1878	1884	1888	1884	1888
Sydney 着									
5.30—6.00 a. m.			1	1	1	2	1		1
6.00—7.00 a. m.					2	4	3		1
7.00—8.00 a. m.				1	2	4	6	1	1
8.00—9.00 a. m.	1	2	1	1	4	8	7	1	3
9.00—10.00 a. m.	1	1	1	4	4	5	7		1
10.00—11.00 a. m.				1	2	3	4	1	1
Sydney 発									
3.00—4.00 p. m.			1	1	2	3	3	1	1
4.00—5.00 p. m.	1	1	1	2	2	7	6	1	2
5.00—6.00 p. m.	1	1	1	3	5	10	12	1	3
6.00—7.00 p. m.			1	2	3	6	7	1	2
7.00—8.00 p. m.		1	1	1	3	2	2	1	1

Source: Supplements to the N. S. W. Government Gazette

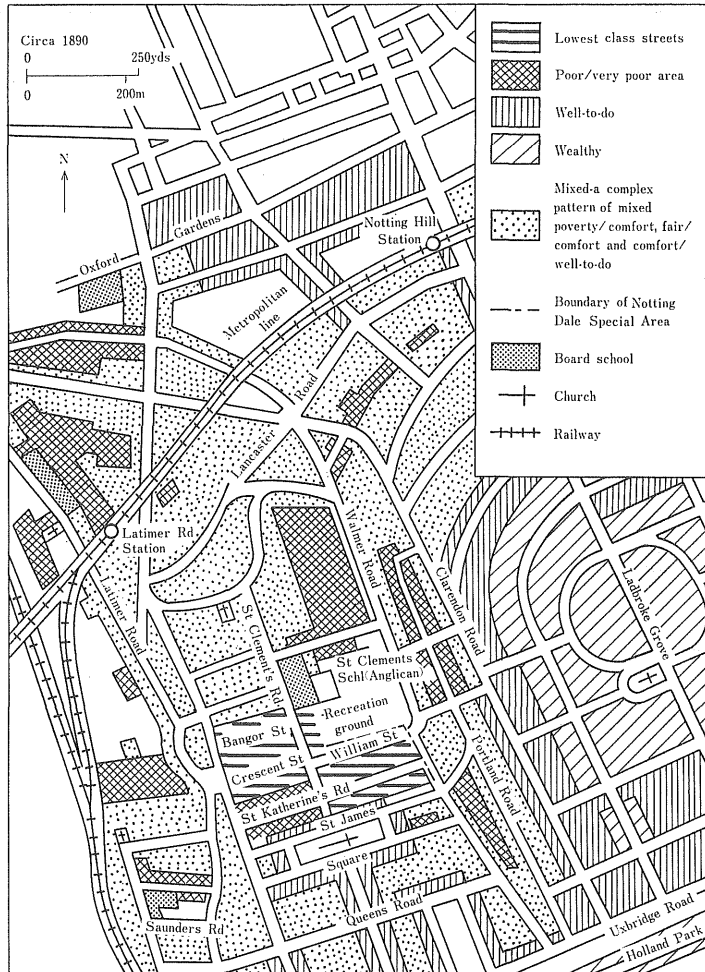
図 1



Source: David Ward, 'Environ and neighbours in the "Two Nations" residential differentiation in mid-nineteenth-century Leeds', *Journal of Historical Geography*, 6. 2 (1980).

それでもなお、それは当時を研究する人々のすべてによって、必ずしも差別的居住形態だったとは考えられていない。ちなみに19世紀中期のイングランド北部の工業都市リーズ（図1）と19世紀末ロンドン市内のノッティング・ヒル地区（図2）における住宅階級の分布状態、および20世紀初期のロンドン（図3）と19世紀末メルボルン（図4）とにおいて6室以上から成る住宅に住んでいた家族の分布を示す図によってみると、イギリスの都市とオーストラリアの都市とのあいだで、住宅階級の形成に格段の差異が存在したようには思われない。旧世界のイギリスとでなく新大陸の諸都市と比較しても、オーストラリアの都市は異なっていたと言われる。南米や北米の都市もオーストラリアの都市と同様に未開の植民地に建設されたが、オーストラリアの都市には、南米諸都市の周辺に存在した大スラム街もなければ、北米諸都市の内部にあったゲットーもなかった、とマッカーティは述べ、オーストラリアとアメリカ大陸の諸都市の間にその相違が生じた理由は、ひとり当たり所得水準と分配における各国間の格差にあったであろうという N. G.

図 2



Source: W. E. Marsden, 'Education', in John Langton & R. J. Morris (ed.), *Atlas of Industrializing Britain 1780-1914* (London, 1986)

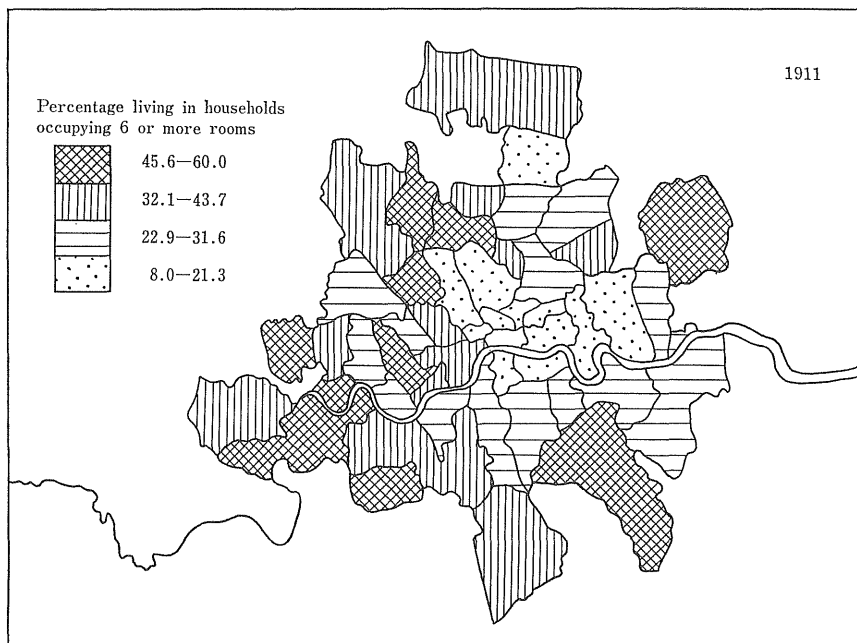
バトリンの考えに同調している⁽¹¹⁾。たしかにコグランは1873年から1888年にかけて賃金が上がり、オーストラリアの労働者の生活水準はイギリスの労働者の生活水準よりずっと高くなったと述べている⁽¹²⁾。ところで前述したように植民地の首府に階級別住宅地の形成が皆無でなく、メルボルンの成長に伴って、労働者の住宅地の様相を呈した工業地区が出現したにもかかわらず⁽¹³⁾、差別的居住形態が顕著でなかったと言われるのはなぜであろうか。多分、それは都市全体の階級別の住宅地の形成が主として経済的条件によったのであり、その他の何らかの差別的基準による社会的条件に基づくものではなかったからではないかと思われる。「貧弱な家が立派な家と軒を

(11) J. W. McCarty, op. cit., p. 117.

(12) T. A. Coghlan, *Labour and Industry in Australia from the first Settlement in 1788 to the Establishment of the Commonwealth in 1901* (London 1918), vol. III, pp. 129-40.

(13) J. W. McCarty, op. cit., p. 128.

図 3



Source: Hugh McLeod, 'Religion', in Langton & Morris (ed.), *Atlas of Industrializing Britain*.

連ねており、小さな家、というより小屋、が豪邸に隣接して立っている」⁽¹⁴⁾ という状況はそれを反映したものであったろう。19世紀末オーストラリアの都市社会の顕著な特徴は、民主的で平等主義だったことであり⁽¹⁵⁾、オーストラリアの労働者は仕事を終えると服装を整え、紳士然と振

(14) In E. E. Morris (ed.), *Picturesque Australasia*, vol. 1, p. 58 quoted in Graeme Davison, *op. cit.*

(15) R. E. N. Twopenny, *Town Life in Australia* (London 1883) in C. M. H. Clark (ed.), *Select Documents in Australian History 1851—1900* (Sydney 1955), p. 683.

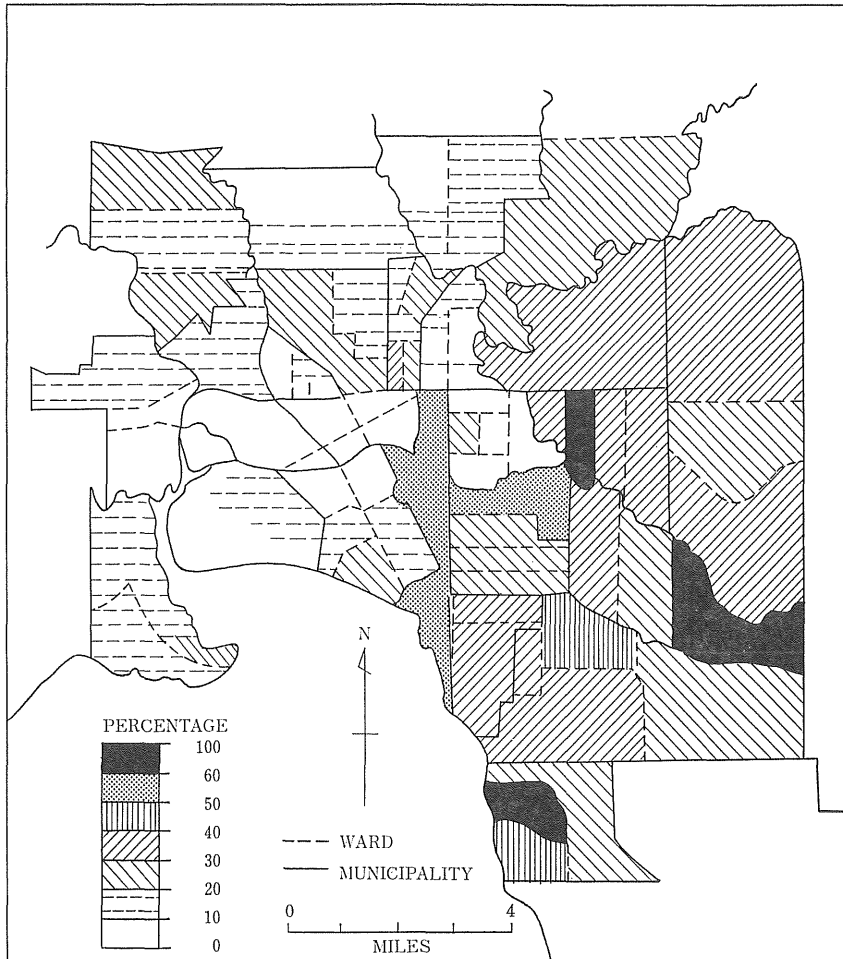
Enc. in H. Parkes and W. B. Dalley to the Secretary for Lands, 25 Sept. 1861. V. and P. of the Legislative Assembly of N. S. W. 1861—2, in C. M. H. Clark (ed.), *op. cit.*, pp. 242-3.

労働者の賃金

		N. S. W.				ロンドン		エディンバラ	
		1	2			3	4		
		1859年	1891年			1863年	1891年	1863年	1891年
大	工	9 S. ~ 11 S.	9 S. 6 d.	大	工	5 S. 6 d.	—	4 S. 6 d.	31 S. 11 d.
石	工	9 S. ~ 11 S.	10 S. 6 d.	石	工		—		
不熟練労働者		7 S. ~ 9 S.	8 S.	不熟練労働者		3 S. 4 d.	26 S.	3 S. 6 d.	—

- 欄以外はすべて平均
 - ロンドンとエディンバラの1891年の数字は週給で他はすべて日給
- 資料 N. S. W. の1859年は C. M. H. Clark (ed.), *op. cit.*, p. 243.
 N. S. W. の1891年は G. H. Wood, 'Changes in Average Wages in New South Wales, 1823—98', *The Journal of the Royal Statistical Society*, vol. 64, 1901, pp. 327-35.
 ロンドンとエディンバラについては, A. L. Bowley, *Wages in the United Kingdom in the Nineteenth Century* (Cambridge 1900), pp. 62 & 90.

図 4



Source: Graeme Davison, 'Public Utilities and the Expansion of Melbourne in the 1880 s', *Australian Economic History Review*, vol. 10, no. 2 (1970).

舞ったとも言われている⁽¹⁶⁾。メルボルンに出現した階級別の住宅地は、経済的理由と貧富の差の直接的比較を忌む心理的理由とから生じたものであったとデイヴィソンは考えている⁽¹⁷⁾。

2. 労働賃金と生活状態

パラダイスと呼ばれたオーストラリアの社会にも陽の当たらない部分は当然存在した。たとえば1860年のシドニーにおける労働者の生活状態は当時のロンドンのスラム街よりひどいという報

(16) A. Métin, *Le Socialisme sans Doctrines* (Paris 1901) in C. M. H. Clark (ed.) *op. cit.*, p. 676.

(17) Graeme Davison, *op. cit.*, pp. 170-1.

告があり⁽¹⁸⁾、また19世紀後半に政府から農地を分譲されて比較的中・小規模の農業経営に従事したセレクタ selector のうち、ヴィクトリア植民地とサウス・オーストラリア植民地の人々は成功を取めたが、N.S.W. のセレクタたちは辛酸を嘗め、なかには20世紀に入っても台所の流しや家の床板のような「文明」的設備さえなく、家族全員が朝から晩まで働いても惨めな生活しか送れなかった人々がいた⁽¹⁹⁾。しかしそれは特殊な例であった。そういった特殊な事例を除けば、オーストラリアの人々一般の生活状態が1890年まで悪化することなく向上していったことは、バックリとホイールライトも含めて、すべての研究者が認めるところである⁽²⁰⁾。1860年のN.S.W.の賃金はイングランドの賃金より高く、食料はイングランドより安かった。たとえば食肉の価格は1861年のN.S.W.では1ポンド2ないし4ペンスであって、イングランドの1840年に4.6ないし6.4ペンス、1880年ごろに6ないし9ペンスと比べると2分の1以下であった。工業製品はイングランドより25%割高の価格で売られたが、1860年から1890年まで労働賃金は熟練不熟練を問わず低下することなく、特に不熟練労働者の日給はイギリスのその2倍ないしそれ以上であった。しかしこれらの数字によってイギリスとオーストラリアの労働者の生活を比較して、漠然とオーストラリアの労働者の生活の安楽の程度がイギリスの労働者のそれより高かったであろうと推測はできるが、正確に比較することはできない。そもそも、平均賃金やひとりあたり国民所得によって、生活様式や環境の異なる国際間の生活水準を比較することが妥当でないことは先人の研究に俟つまでもなく⁽²¹⁾、当今、日本人が実感するところである。たとえオーストラリアの社会にイギリス的文化と生活様式が支配的だったとしても、移民が続々と大量に渡来して⁽²²⁾、社会全体としても個々の家族としても、低水準の生活状態からイギリス型の生活様式を短期間に創出し、不足のものを充足していったのであるから、この社会とイギリスの社会の実質賃金の比較を行な

(18) 'Report from the Select Committee on the Conditions of Working Classes of the Metropolis', in C. M. H. Clark (ed.), *op. cit.*, p. 673.

(19) 1861年のN.S.W.のAlienation ActとOccupation Actにより、何人でも1エーカーあたり5シリングの証拠金を支払うことによって、王領地の40エーカー以上320エーカー以内の土地をエーカーあたり1ポンドで購入でき、証拠金を差し引いた残りのエーカーあたり15シリングの代金の利子は年利5%で無期限に借入れ可能とされ、しかも、入植後3年間はその利子も免除された。土地が売却された条件は、購入者自身が土地に入植して農業に従事することであった。このようにして土地を購入した者が selector と呼ばれる。selection acts は1860年から1880年にかけて他の植民地政府によっても制定された。

Russel Ward, *Australia, A Short History*, (Sydney 1969), pp. 86-90.

Manning Clark, *A Short History of Australia* (New York 1963) revised and updated edition 1969), pp. 144-5.

(20) 食肉のイングランドの価格については Robert Giffen, *The Progress of the Working Classes in the Last Half Century*, (The Society for Political Education, Economic Tracts no. 16, New York 1885), p. 13. オーストラリアの価格については C. M. H. Clark (ed.), *op. cit.*, p. 242.

(21) E. Ronald Walker, 'International Comparisons of Living Standards', in F. W. Eggleston, E. R. Walker, G. Anderson, J. F. Nimmo, *Australian Standards of Living* (Melbourne 1939), p. 64.

(22) オーストラリアへの移民の流入数と総人口は次のとおりである。

うことは不適當であろう。いな、オーストラリアの労働者の実質賃金の算定自体が困難であろう。そこで次には、人々の社会的満足感をみtus社会移動によって、オーストラリアの都市社会がイギリスと比較してどれほど労働者にとって居心地よいものであったかを見ることにする。

3. 社会移動

19世紀イギリスの社会はカスト的階級社会に近かった。そこでは、上・中層階級と労働者階級とが截然と区別され、互いに別の社会生活を営んだと言ってもよいであろう。中層階級の下位にあった下級の事務職や店員でさえ、自分たちは労働者と異なり、労働者より一段上の階級に属すると考え、そのように行動した。熟練労働者の家族に生まれた者が中層階級の職業に就いて上向移動を達成した例は少なくなかったが、その社会移動によって、中層階級と労働者階級との間の社会的断絶が狭まることは、少なくとも19世紀末まではなかったと思われる。また労働者階級のなかにも、熟練労働者と不熟練労働者の間に区分があり、労働者の父子二世代間の職業の継承に関するクロックの調査では、熟練工・不熟練工ともに、父子二代の職業の継承が多かった。すなわち1873—75年の結婚した者のサンプルで、事務職の新郎の4.5%、熟練労働者の8%新郎のみが不熟練労働者の息子だったのである⁽²³⁾。1890年以前に不熟練労働者の家族に生まれた者で、熟練労働者か一般事務職に上昇したのは10%であった⁽²⁴⁾。最上層のエリートへの上昇は1890年に不熟練労働者の息子だった者の1%、熟練労働者の息子の4%にすぎなかった⁽²⁵⁾。

他方、19世紀オーストラリアでは下層からの上向移動が容易であると一般に信じられており、そのこともオーストラリアが労働者のパラダイスと言われたひとつの理由であった。そのように考える伝統が生じたのは当然であろう。オーストラリアに西洋人の社会が建設された過去200年間にそこに渡来した人々のなかには、殆んどまたは全然、資産を携えずに上陸した人が多数いた。

年	移民による純増	年	オーストラリアの総人口
1788—1850	332,000	1851	437,665
1851—1860	601,400	1861	1,168,149
1861—1870	168,000	1871	1,700,888
1871—1880	191,000	1881	2,306,736
1881—1890	383,000	1891	3,240,985
1891—1900	767,000	1900	3,765,339

移民による純増については、

W. D. Borrie, 'British' Immigration to Australia', in A. F. Madden and W. H. Morris-Jones (eds.), *Australia and Britain, Studies in a Changing Relationship* (London, 1980).

総人口については、

関根政美「オーストラリアの歴史的発展と現代の諸問題(二)」『法学研究』慶應大学法学部 第55巻12号 1982年 p. 45.

(23) Geoffrey Crossick, *An Artisan Elite in Victorian Society* (London 1978), pp. 116-7.

(24) D. V. Glass and J. R. Hall, 'Social Mobility in Great Britain: A Study of Inter-Generation Changes in Status', in D. V. Glass (ed.), *Social Mobility in Britain* (London 1954), p. 186.

(25) John Westergaard and Henrietta Resler, *Class in a Capitalist Society* (Heinemann Education Books 1975 Pelican Books 1976), p. 315.

囚人はその最たる者であった。流刑囚のなかには様々な人がいて、そのなかには今日では流刑という刑罰からは想像できないような罪で送られた者がいた。例えば N.S.W. の 5 代目の総督マックオリ Lachlan Macquarie の下で働いた建築家のグリーンウェイ Francis Howard Greenway は事業不振で破産したことを秘匿した罪で 14 年の流刑に処された男であり⁽²⁶⁾、1838 年の流刑に関する議会報告書のなかで、オーストラリアでの服役中に節儉を心懸け、刑期を終えて結婚した後も勤勉に働いて産を成した例として挙げられている禁酒主義の男は、ヨークシャの共同地で一羽の鶯鳥を盗んで流されたのであった⁽²⁷⁾。また 1830 年代にオーストラリアで大商人兼、蒸留・醸造業者となっていたクーパー Robert Cooper は、盗品を受け取った罪を問われたパブ経営者だったのである⁽²⁸⁾。シオオはオーストラリアへ流された囚人の多くは、比較的軽い罪を犯したものであったらしいと述べている⁽²⁹⁾。それどころか、道徳的には全然罪でないことの故に流刑の憂き目に遭わされた人も大勢いたのである⁽³⁰⁾。流刑囚で刑期を終えた人、エマンシピスト、のなかに実直に勤勉に生業を営んだ人が多かったとしても不思議ではない。特に植民地時代の初期には教育を受けた者が少なかったので、専門的技能や知識の修得者は珍重されたのであった。また流刑囚を刑期終了後はオーストラリアで自活させるのがイギリス本国政府の方針であり、彼らに対して本国へ帰る便宜は供与せず放置した⁽³¹⁾。但し農耕に従事する意志のある者には土地を与え、1819年に N.S.W. には約4000人の男性囚人が刑期を終えており、そのうちの 808 人は、平均して 46 エーカーの土地を耕し 28 頭の牛と 45 頭の羊を飼っていた⁽³²⁾。開墾地で農業経営に成功することは誰にでも可能ではなく、ある程度の資力、知識と技術、体力と忍耐力が必要であった。しかしそれらの要件を欠いた人たちでも、景気循環による不況時を除くと、働く意志があれば雇用機会は不足せず、勤勉に働けば生活状態を改善できた。また 19 世紀前半には、本国からもたらされた商品を買占めて住民たちに売却しようとした士官たちと一般住民との間に立つ中間商人がいなかったため、商才に長けたエマンシピストが活躍する余地も十分にあったのである⁽³³⁾。

(26) Edward Shann, *An Economic History of Australia* (Cambridge 1930) (reprinted 1967) pp. 64-5.

(27) Parliamentary Papers, 1837-1838 XXII/pp. 5-21, Transportation: Molesworth report (1838) in David C. Douglas (ed.), *English Historical Documents* vol. XII (1) 1833-1874 (1956) (reprinted 1970), p. 524.

(28) Ken Buckley and Ted Wheelwright, *op. cit.*, p. 41.

(29) A. G. L. Shaw, *The Economic Development of Australia* (New York 1944) (reprint 1964), p. 14.

(30) Eric Richards, 'Australia and the Scottish Connection 1788-1914', in R. A. Cage (ed.), *The Scots Abroad, Labour, Capital, Enterprise, 1750-1914* (London 1985), p. 115.
 イングランドからの政治犯は 1000 人をずっと下まわったが、アイルランドからの流刑囚の場合には、おそらく 5 分の 1 の 7000 人以上がその種の人たちだったろうと考えている。A. G. L. Shaw, *Convicts and the Colonies, A Study of Penal Transportation from Great Britain and Ireland to Australia and other parts of the British Empire* (London 1966), pp. 152, 166.

(31) *Ibid.*, p. 66.

(32) *Ibid.*, p. 86.

(33) Ken Buckley and Ted Wheelwright, *op. cit.*, p. 41.

オーストラリアが社会的上向移動の容易な社会と考えられたもうひとつの理由は、当時には事業規模が概して小さく、熟練職人が独立して自営業を始める機会がかなり多かったからであった。ちなみに1870年代に小規模な印刷業の創業に必要な資金は50ポンド位で、熟練職人の賃金で貯え得る額であった。1854年に N. S. W. の新聞の植字工のストライキの準備を共同謀議の廉で有罪とした N. S. W. の裁判所長は、その種の謀議の取り締まりは職人たち自身にとっても利益になる、なぜならば、今日の労働者は明日の雇用主だから、と言ったと報告されている。熟練職人のなかの雇用主と自営業の割合を社会的上向移動の指標のひとつとして見るならば、1891年のセンサスで、メルボルンの左官職の16%、配管職の17%、スレート屋根葺き職の17%が雇用主か自営業であった⁽³⁴⁾。これをイギリスの1901年のセンサスでみると、ロンドンの左官職の5.6%、配管職の12.1%、スレート屋根葺き職の8%が雇用主か自営業であった⁽³⁵⁾。確かにこの比率はオーストラリアの方が高いのだが、オーストラリアでは労働者のなかに熟練と半熟練の者が多数いたことを考えなければならないであろう。1880年代に彼らは労働力全体の42%を占め、不熟練労働者は23%、その他はホワイト・カラーであって⁽³⁶⁾、熟練労働者の比率はロンドンよりずっと高かったと思われるのである。バックリとホイールライトは熟練職人の独立の可能性は19世紀後期でもオーストラリアの労働者の明るい側面だったと書いている⁽³⁷⁾。しかし不熟練労働者の上向移動はバックリとホイールライトによれば非常に困難であって、ニューカッスルの炭業地帯で、炭坑夫の息子の81%は坑夫になった⁽³⁸⁾。もしそうだとすると、不熟練労働者に関しては父子二代の職業の継承というイギリスと同じ型の労働の再生産が行なわれていたことになるが、この点については更に研究が進められなければ明確なことは分らない。

次にエリートへの上昇であるが、これも19世紀について明らかなことは示されていない。サンプルが不十分であるが、オーストラリア人名辞典 *Australian Dictionary of Biography* の第1巻（主たる活動の時期が1788年から1850年まで）と第3巻（主たる活動の時期が1851年から1890年まで）の各々から初めに記載されている約100人と150人についてみると、19世紀オーストラリア社会の上層にいた人々のうち、労働者階級の家族の出身は前半では約8%、後半では約6%である。全部で8巻、記載人名件数は数千に及ぶなかの僅かに250件あまりの数字から一般的傾向を抜き出すことは危険だが、一応の参考までに次の表を示す。

父の職業が不明のものが相当に多いが、これは所掲の記事によると、必ずしも出所不明の卑賤の出自とは限らない。しかしそのなかには若干の労働者も含まれていたであろうから、19世紀のオーストラリアの社会の上層で活躍した人のなかに労働者の家族の出身者が占めた比率は同時期

(34) *Ibid.*, p. 160.

(35) 1901 Census, *England and Wales*

(36) Ken Buckley and Ted Wheelwright, *op. cit.*, p. 142.

(37) *Ibid.*, pp. 159–60.

(38) *Ibid.*, p. 161.

本人の職業 父の職業	1788—1850年					1851—1890年				
	専門職	農牧業	工業	商業	計	専門職	農牧業	工業	商業	計
上層階級(大地主層)	5	12	0	1	(17.3) 18	6	2	0	1	(5.8) 9
専門職	13	3	1	0	(16.3) 17	32	4	1	1	(24.3) 38
大商人	2	3	0	5	(9.6) 10	6	5	0	6	(10.9) 17
製造業者	0	0	1	1	(1.9) 2	4	0	0	2	(3.8) 6
農場経営者	2	8	0	0	(9.6) 10	8	10	1	2	(13.4) 21
零細企業と一般事務職等	2	1	1	1	(4.8) 5	13	4	1	5	(15.4) 23
熟練労働者	1	2	0	0	(3.8) 4	2	4	0	1	(4.5) 7
不熟練労働者	2	1	0	1	(3.8) 4	1	0	0	1	(1.3) 2
不明	18	5	4	7	(32.7) 34	22	4	2	4	(20.5) 32
計	45	35	7	17	104	95	33	5	23	156
エマンシピスト(内1名は息子, 1名は甥)	5	3	4	1	(12.5) 13	0	1	1	0	(1.3) 2

資料: Australian Dictionary of Biography (Melbourne 1966, 1983 edition) vol. 1 and 3.

のイングランドより高く、下位中層の出身も含めて考えれば、世紀後半にはかなり高かったと言えよう。また、特に世紀前半にはエマンシピストが13人もいたことは注目に値する。

さらにに参考までに20世紀中葉の状況を見ると、1956年と1957年のサンプルの調査で、不熟練・半熟練の労働者の家族からエリートに上昇できたのは、実業家の場合に2%、中央政府官僚の場合に6%、州政府官僚の場合に7%であり、熟練労働者と不熟練労働者を合わせた労働者階級の出自は、実業家が11.5%、中央政府官僚が22%、州政府官僚が21%であった⁽³⁹⁾。また1970年代後半の調査によってみると、サンプルの370人うち、労働組合の指導者を除けば、彼らの父の大部分が経営者か上級専門職であり、サンプル中の28%のみが下級事務職・職長・労働者の家族の出身であった。370人のなかには労働組合の指導者が50人いたから、それ以外のエリートの10数パーセントの人々の出自は下級事務職や労働者の家族だったことになる⁽⁴⁰⁾。これは必ずしも高い上向移動率とは言えない。ちなみに1972年のイングランドの上級の、専門職・管理職・経営者の父親は、25.3%が同種類の地位、13.1%が下級の、専門職・管理職・経営者、10.4%が事務職、10.1%が自営業、12.5%が下級の技術者・職長、16.4%が熟練労働者、12.2%が半熟練・不熟練労働者であった⁽⁴¹⁾。

(39) A. F. Davies and S. Encel 'Class and Status', in A. F. Davies and S. Encel (eds.) *Australian Society, A Sociological Introduction* (New York 1965), p. 28, Table 4.

(40) John Higley, Desley Deacon and Don Smart, *Elites in Australia* (London 1979), pp. 27, and 29.

(41) Henry Phelps-Brown, 'What is the British Predicament?', reproduced from *Three Banks Review*, 116 (1977), pp. 3-29, in David Coates and John Hillard (eds.), *The Decline of Modern Britain; The Debate between Left and Right*, (Brighton 1986), p. 174.

19世紀後期にオーストラリアの労働者の息子が上向移動して普通のホワイトカラーや専門職になったり、独立して事業を起こしたり雇用主になったりする機会は比較的が多かったと思われるが、現在では最上層のエリートになる可能性はかなり限定され、イギリスと大差ないと思われる。

4. 資 産

現代のオーストラリアでは家屋所有に高い価値が付され、93%のオーストラリア人が賃貸住宅でなく家屋を所有することを望んでいるという調査結果が出されている⁽⁴²⁾。パトリンは、1891年のオーストラリアの住宅の2分の1をかなり上まわる部分が持ち家であると述べた⁽⁴³⁾。1911年のセンサスもオーストラリアの家屋の住人の約2分の1が持ち家に住んでいることを示した。しかし、これは全国平均の数字であって、これを植民地の首府に限ってみると、1891年のセンサスによれば、シドニーの家屋の住人でその家を所有していたのは30%であった⁽⁴⁴⁾。メルボルンでもその比率は41%であったことを示して、バックリとホイールライトは、この数字は労働者の住宅だけに限定すればもっと低くなるであろうと述べ、労働者が持ち家に住んでいた程度は、国際的水準では高かったかもしれないが、これは伝統的な描写の中の誇張された要素であったと述べている⁽⁴⁵⁾。実際、遺言検認証によってヴィクトリアの個人財産の分布を調査したルービンスタインは、オーストラリアの普通の人間は遺言検認証による統計に現われる財産を、1860年と1880年の二つの時点では全然遺さず、「仮りにオーストラリアが世界最高の生活水準を労働者に提供したとしても、それは極く少数の者にしか家屋や銀行預金残高、いまいかなる種類にせよ評価できるような財産を遺すことを許さない程度のものであった」と書いている⁽⁴⁶⁾。1915年の調査によると、男性の所得稼得者の上位1%が全体の15%近くを稼得し、上位10%が全体の40%を得ていた。資産の所有では成人男子の0.5%が富の総計の30%を所有し、人口の5%が富の66%を所有しており、他方、80~90%の大多数は、衣服や僅かな家具のほかには何も所有していなかった。この数字を挙げて、バックリとホイールライトは‘them’と‘us’との古い区別は階級社会において依然として妥当したと書いている⁽⁴⁷⁾。

5. 階級観念

19世紀オーストラリアの社会が、いな現在のオーストラリアの社会でさえ、階級社会か否かに

(42) Leslie Kilmartin, David Thorns and Terry Burker, *Social Theory and the Australian City* (1985) 吉井弘訳『オーストラリアの社会構造』(勁草書房1988年), p. 143.

(43) N. G. Butlin, *Investment in Australian Economic Development 1861—1900*, pp. 259—60.

(44) R. V. Jackson, ‘Owner-occupation of Houses in Sydney 1871 to 1891’, *A. E. H. R.*, vol. 10, no. 2 (1970), p. 141.

(45) Ken Buckley and Ted Wheelwright, *op. cit.*, p. 161.

(46) W. D. Rubinstein, ‘The Distribution of Personal Wealth in Victoria 1860—1974’, *A. E. H. R.*, vol. 19, no. 1, 1979, p. 38.

(47) Ken Buckley and Ted Wheelwright, *op. cit.*, pp. 244—5.

については、意見の分かれるところであるが、オーストラリアが現在の日本に似た階級のない社会であるとは、日常生活の水準で屢々見聞する言葉である⁽⁴⁸⁾。賃金の部分的返上を条件としたにせよ、世界で初めて労働組合の闘争によって8時間労働日を獲得し⁽⁴⁹⁾、わずか1週間とは言え1899年にドーソン Andrew Dawson がクイーンズランド植民地で世界最初の労働党政権の首相となった国であり⁽⁵⁰⁾、ストライキによる労働者ひとりあたりの労働損失日も国際的に低い水準でないオーストラリアで⁽⁵¹⁾、そのように言われるのはなぜであろうか。

ここで注意しなければならないのは「階級がない」という言葉の意味であろう。それはオーストラリアの社会があらゆる点で平等であるとか、社会的地位の区別とそれによる階層構造が存在しないとかいうことを意味するのではないのみならず、人々がその社会的区分を意識していなかったことを意味するものでもないであろう。1949年のメルボルンのラ・トロウブ La Trobe 地区の調査では、「もしあなたが社会のいずれかの集団なり部分なりに属すると答えなければならぬとしたら、何と答えますか」という質問に答えさせるために、調査者は回答者の5人のうち4人に対して、漠然とにせよ、階級という概念を与えなければならなかったとはいえ、その結果は次のとおりであった。

中層階級	44%
労働者階級	37%
他の階級	2%
回答拒否、階級概念に反対	9%
無階級	8% ⁽⁵²⁾

また収入の格差によって社会的地位の階層が出現していたことも確かである。ローソンによると、1890年ごろのブリズベンで最も高い地位を占めたのは一流の商会経営者・金融業者・専門職、少数の大製造業者、若干の大牧場経営者であり、その次に位置するとされたのが二流の商業経営者・製造業者・専門職、2～3人の従業員の雇用主、下級専門職であり、その下に自営業者、下級事務職員、熟練労働者がいて、最下層が不熟練労働者とされていた⁽⁵³⁾。

そもそも、社会が生まれつき不平等な資質の人間によって構成される限り、各構成員の活動のあり方が異なるのは自明である。そして、その社会で最も価値が高いとされるものにおいて有能

(48) 布川清司、『オーストラリアの暮らしと心』（編集工房ノア 1988年）p. 35.

堀 武昭『オーストラリアの日々、複合多文化国家の現在』（NHK ブックス, 1988）, p. 38.

(49) John Niland, 'The Birth of the Movement for an Eight Hour Working Day in New South Wales', *The Australian Journal of Politics and History*, vol. 14, no. 1, 1968, pp. 75-87.

(50) Russel Ward, *The History of Australia, The Twentieth Century*, 1901-1975, p. 74.

(51) D.W. Oxnam, 'The Incidence of Strikes in Australia', in J.E. Isaac and G.W. Ford (eds.), *Australian Labour Relations: Readings* (Melbourne 1966), p. 22.

(52) A.F. Davies and S. Encel, *op. cit.*, p. 34.

(53) R. Lawson, 'Class or Status?—The Social Structure of Brisbane in the 1890s', *The Australian Journal of Politics and History*, vol. 18, no. 3, (1972), pp. 345-6.

な人間は、その社会で他者に優越する地位を占めるであろう。その地位は他を支配する権力をさえ、その地位の保持者に与えるであろう。社会が未分化のあいだ、その支配・被支配の関係は単純だが、社会構造が複雑に分化すれば、本質的には支配・被支配の関係を軸とする様々な小集団が成立する。しかし、近代資本主義社会において最も重要で強力なのは、政治過程において社会統制的機能を果たす支配者と、生産過程において生産要素を統合する企業家的機能を果たす支配者の二者である。支配者たちはその支配機構のなかで社会・経済的特権を獲得し、その特権を擁護するために互いに団結し、特権的集団を形成する。この特権的な集団を私は支配階級と呼ぶことにする。支配階級の成立は、当然、支配される人々の集団の存在をも意味するが、彼らは必ずしも自分たちが支配・被支配の階級関係にあると感じるとは限らない。人々がそう感じない社会、あるいは階級意識のない社会では、人々はあたかもその社会に階級がないかのように感じる。オーストラリアの社会はこれに近いのではないかと思われる。では人々に階級がないと感じさせる条件は何であろうか。それを列挙すると次のとおりである。

- A 支配階級の地位が制度的に世襲されず、人員補充が既成の支配階級からなされる制度がないこと。すなわち社会的流動性が存在すること。
- B 支配階級の特権が他の人々から隔絶したものでないこと。
- C 貧富の差が支配階級と被支配階級の間のみ的大幅に存在しないこと。
- D 支配階級の構成員がその地位を得たことの正当性に対して社会一般の合意が形成されていること。
- E 民主主義が自明の規範とされている現代では、支配されている人々も支配機構の一端に包含されており、従って支配階級はすべての人々の代表と考えられていること。

以上の5点の条件の多くが満たされている社会では、人々は階級がないかの如く感じるであろう。最後に、その5条件がオーストラリアの社会でどのように実現されていたか、あるいはいなかったかを検討して、この試論を結ぶことにする。

A 支配階級の地位の世襲

オーストラリア植民地にイギリス本国の世襲的貴族制度は移植されなかった。植民地の総督はイギリスの上層階級のジェントリの一員であったが、任期の終了と共に帰国し交替した。イギリスの貴族に匹敵するものをオーストラリアの社会に求めれば、それはスクオッター Squatter と呼ばれる大土地所有者であろう。Squatter とは、もとは土地の不法占拠者を意味する語である。彼らがそう呼ばれたのは、植民地総督が設けた境界を違法に越境して王領地を無許可で占拠したからである。1829年に時の N.S.W. の総督ダーリング Sir Ralph Darling は、幾百人の野盗化した逃亡囚人の跳梁もあって、行政と治安維持を確実にするためにシドニーを中心に約 400 キロ以遠を立ち入り禁止とした。しかし、この境界は無視され、なかでも旧士官も含めて資力と情報とに恵まれたひとたちは広大な土地を違法に占拠して牧羊を行ない、1836年ごろにはおよそ 100

万頭の羊が飼われていた。1836年に総督バーク Richard Bourke は現状を迫認し面積に関わりなく年間に10ポンドの免許料で牧羊を許すことにしたのであった⁽⁵⁴⁾。その後、制度が変更されて地代が徴収されるようになったが、彼らは Squatter と呼び続けられた⁽⁵⁵⁾。大土地占有者、大牧場経営者を Squatter と呼び続けてきた背後に、本国のイギリスに存在する世襲の大地主貴族制度に対するオーストラリアの人々一般の心理を読み取るのは行き過ぎであろうか。レーニンがオーストラリアの労働運動に階級意識が欠如しているのは、彼らがオーストラリアに来るまで生活していたイギリスで、彼らが生まれてから出国するまで自由主義的思想が支配的だったからであると述べたが⁽⁵⁶⁾、仮りに彼らが労使協調路線を採ったとしても、彼らに「富者と貧者」の英国人的階級観がなかったはずはない。彼らがオーストラリアに来て、もし階級観念から自由になったとすれば、それは富者の中核をなすところの伝統的権威の指導者であり象徴である貴族階級がオーストラリアに存在しなかったからである。彼らは「ジェントリの理想」の呪縛から解放され、「富者」に対して憚るところなく、紳士のような服装をして紳士然と振る舞うことができるようになった。それは本国ならば分不相応で常識外のこととして、上からも、仲間からも排斥されることだった。もはや筋肉労働を基準にした「富者と貧者」あるいは them と us の区別は少なくとも労働者の側においては払拭されたと思われる。19世紀のオーストラリアでは、「人は社会の一員であり、ひとかどの者である」と感じたのであって、イングランドで「2700万分の1の無価値なものと感じた」のとは大違いであった⁽⁵⁷⁾。1891年に N.S.W. の議会で労働党の議員として選出されたブラック George Black は、「我々は手であれ頭であれ、知力であれ筋肉であれ、それによって働く賃金稼得者の代表である」と述べ、1906年にスペンス W.G. Spence は労働党は階級のためでなく、すべての人のためのものであると言い、1947年にチフリ J.B. Chifley は、「労働者階級とは、筋肉労働であれ他の仕方によってであれ、働く男女から成っている」と述べた⁽⁵⁸⁾。このようにオーストラリアでは、イングランドの労働者階級と、知的労働や手を汚さない仕事に従事する中層階級とを截然と分けた線は、少なくとも労働者の側からは設けられなかったのである。また、先に見たとおり熟練職人が独立して自営業を営み、資本家として雇用主になる機会が相当に大きかった。1891年の N.S.W. のセンサスでは、就業者の73.9%が、被傭者で26.1%が雇用主か自営業であった⁽⁵⁹⁾。N.S.W. で衣服製造業に従事した17,000人のうち4,000

(54) Russel Ward, *Australia, A Short History*, p. 55.

Jill Kitson, *Great Emigration 2, The British to the Antipodes* (London 1972), p. 22.

(55) *Collins English Dictionary*によると Squatter とはイギリスでは不法な土地の占拠者であり、オーストラリアでは国王の借地人として牧場を占有する者。大規模な牧場経営者とされている。

(56) I. Lenin, 'The Labour Government in Australia', in L. L. Sharkey (ed.), *Australia Marches On* (Sydney 1943) quoted in D. W. Rawson, 'Labour, Socialism, and the Working Class', *The Australian Journal of Politics and History*, vol. 7, no. 1, 1961, p. 90.

(57) R. E. N. Twopenny, *op. cit.*, p. 682.

(58) D. W. Rawson, *op. cit.*, p. 75.

(59) R. Lawson, *op. cit.*, p. 354.

人は自営業であったとも言われている⁽⁶⁰⁾。下層から最上層へと上昇する道はそれほど広くはなく、現代のエリートが16歳だったときの父の職業は、3分の1が事業経営者、4分の1が専門職で、28%が労働者や下級事務職であった。しかしその当時、全就業人口中に事業経営者と専門職が占めた比率は僅かに10分の1で、労働者や下級事務職が占めた比率は約69%であったから、上昇の難度が極端に大であったとも言えず、社会移動による上昇の可能性は、なんと言ってもオーストラリアの夢であり、ある程度現実でもあったのである。

B 支配階級の特権

19世紀前半に大牧場を占有する権利を確立したスクオッタは、特権階級を形成しつつあった。豊かなスクオッタは植民地の首府に豪荘な邸宅を営み、植民地の社会を政治的にも経済的にも支配した。1858年から1861年にかけて、ヴィクトリア植民地でサッチャー Charles Thatcher なる吟遊詩人は次のような詩を吟じて人気を博した。

スクオッタの権利を打倒せよ
 貧しい者に家を与えよ
 この国人を力づけよ
 さすれば、もはやさ迷う者はなくなろう。
 願わくは、働く者に土地を与え、
 誠実に懸命に働く者を大切にせよ。
 さすれば、隣人を羨む者はなく
 人みな足ることを知り、幸せ満ちるであらう⁽⁶¹⁾。

しかしスクオッタがオーストラリアの社会の権力の中核に居たのは19世紀半ばまでのことで、1856年から1858年までの間に N.S.W., ヴィクトリア, クイーンズランド, サウス・オーストラリアの各植民地で男子普通選挙権, 無記名投票, 議員選挙権の財産資格の撤廃が制定されて、スクオッタは植民地議会の少数派となり、中・小農育成のために国有地を分譲する法律が各植民地で制定され、スクオッタの特権的地位は縮小された⁽⁶²⁾。

C 支配階級の富

オーストラリアの社会の富のピラミッドの最上層と底辺とを比較すれば、大きな格差が存在したことは確かである。1909年に死去したシドニーのデパート経営者は300万ポンドの遺産を残し、そのデパートで働いていた女子店員の賃金は週給1ポンドであった⁽⁶³⁾。しかしオーストラリア社会の形成過程にあっては、その格差は他の国に比較してあまり大でなかったとも言われている。1830年代以前に N.S.W. に遺された最大の遺産は2万ポンドであったが、これは同時代のイン

(60) Ken Buckley and Ted Wheelwright, *op. cit.*, p. 160.

(61) Manning Clark, *op. cit.*, p. 140.

(62) *Ibid.*, p. 147.

(63) Ken Buckley and Ted Wheelwright, *op. cit.*, p. 244.

グランドの地方都市のたかだか中級の商会経営者の財産に相当するものであり、1788年から1939年までの時期をみると、オーストラリアの富者の富は、米国、英国、ドイツ、南アフリカの富者の富に比してかなり小さいものであった⁽⁶⁴⁾。給与の格差も最高と最低では大きく、ブリズベンの総督の俸給は年俸5000ポンド、裁判所長官の年俸が2500～3000ポンド、警官が122ポンド、小学校の男性教員の最低給与は102ポンド、熟練労働者は日給8～12シリングで、完全雇用ならば年間に102～170ポンド、不熟練労働者は日給7～8シリングで、完全雇用なら年間に88ないし102ポンドである。イングランドの場合と比較して目につくのは、熟練労働者と不熟練労働者の賃金の格差が小さいことである。19世紀の30年代ごろまではその格差はむしろ甚だ大であったのが、19世紀中葉以降にそれは縮小したと思われる。収入の格差の小なることは、社会の上部についても言われており、トゥーペニは、オーストラリアでは中層の下位 lower middle と中層の上位 upper middle の差異が本国ほど明瞭でないと述べている⁽⁶⁵⁾。ロースンは、オーストラリアでは社会地位集団がなだらかに順次階層を構成して上から下まで連続していたので、両極端の間に存在する溝というようなものはなく、厳密にマルクス主義的意味での階級闘争的な階級は、オーストラリアには形成されなかったと述べている⁽⁶⁶⁾。

D 社会一般の合意

社会で他に比較して優越的地位にある者がその地位を得たことの正当性に対して社会一般の合意が存在するならば、優越者の集団に対する下層の者たちの闘争的階級意識は生じない。没理性的に支配者のイデオロギーが貫徹すれば、その地位は自然の法則なり神与のものなりと考えられる。社会的向上移動の機会が平等に広く開かれていると信じられている社会では、優越者の地位は才能と努力とによって獲得されたと受け止められるだろう。オーストラリアでも、多分それは才能と勤勉の賜と考えられたであろうが、もうひとつ、父祖が初期の開拓者であったことも優越の正当性とされたのではないかと思われる。従ってオーストラリアでは流刑囚の子孫たちが、彼らの父祖をエンクロージャと産業革命・苛酷な治安対策と刑法の犠牲者とし、その迫害に耐えた開拓者として理想化して⁽⁶⁷⁾、先祖が流刑囚であったことを吹聴さえるのである⁽⁶⁸⁾。

E 支配機構への参加

1830年代と40年代にオーストラリアに渡った移民のなかには急進主義的政治思想の持ち主も、チャーチズムの失敗に幻滅した労働組合運動家もいた。彼らが自ら植民地の立法議会に代表者を送ることを求めたのは当然だった。1854年はバララトの金の採取量が減少し、月間の免許料30シ

(64) W. D. Rubinstein, 'The Top Wealth-Holders of New South Wales, 1817-1939', *A. E. H. R.*, vol. 20, no. 2, 1980, pp. 140 and 143.

(65) R. E. N. Twopenny, *op. cit.*, p. 682.

(66) R. Lawson, *op. cit.*, pp. 357-8.

(67) A. G. L. Shaw, *Convicts and the Colonies*, p. 146.

(68) John Everingham, 'Children of the First Fleet', *National Geographic Magazine*, vol. 173, no. 2, 1988, pp. 236 & 245.

各植民地における自由主義的諸制度の進展 1850年—1900年

最初の中 小農地分 譲法制定	普通教育 に関する 重要な法 律の制定	植 民 地	植民地政 府による 自治の許 可	成人男 子選挙 権	秘 密 投 票	複数投 票権廃 止	婦人選 挙権	議 員 歳 費	議会の 任期3 年
1861	1880	N. S. W.	1855	1858	1858	1893	1902	1889	1874
1858	1885	タスマニア	1856	1900	1858	1900	1903	1890	1891
1872	1893	西オーストラリア	1890	1893	1877	1907	1899	1900	1900
1860	1872	ヴィクトリア	1856	1857	1856	1899	1908	1870	1859
1872	1875	南オーストラリア	1856	1856	1856	1856	1894	1887	1856*
1860	1875	クィーンズランド	1859	1872	1859	1905	1905	1886	1890

* 議会任期5年 1933—1939年

Russel Ward, *Australia, A Short History*, p. 84.

リングを重すぎる負担と感じた坑夫たちは、いわゆるユーレカ暴動を起こし、男子普通選挙権、秘密投票、平等な選挙区、財産資格の撤廃、議員の歳費支給を求め、ヴィクトリア共和国建設を叫んで反乱を起こした。反乱は22人の坑夫と6人の兵士の死者を出して直ちに鎮圧され、指導者たちは反逆罪で起訴されたが、世論は彼らを支持し、陪審は彼らが無罪とした。都市の市民のなかには、この暴動以前に、選挙制度に関して同様な主張をする人たちがいたことも注目すべきであろう。この反乱が契機となって1856年から1858年にかけて普通選挙権、秘密投票、財産資格の撤廃が、各植民地で制定された。議員歳費支給は1880年代まで実現されなかったとは言え、これらの制度は参政権を要求した労働者たちに支配機構への参加を一応認めるものであった⁽⁶⁹⁾。これらは、ブルジョアジーの労働者に対する譲歩であったというよりは、急進主義と自由主義の思想がオーストラリアの移民たちの間に強く継承された結果ではなかったかと思われる。19世紀中期以降に民主的な諸制度が構築されていったのは、それ故であった。ウオードは1850年以降の移民にはイギリスの中層階級の人々が多数含まれており、彼らの大多数の思想が自由主義的で急進的だったために、彼らはオーストラリアの社会生活を安定させる効果をもった、と述べている⁽⁷⁰⁾。19世紀末以降に各植民地政府が採った労働者保護的政策は、1890年の大海運ストライキを頂点とした労働者の攻勢がオーストラリアの支配階級を恐れさせた結果であり、彼らをして労働者に譲歩をなさしめたという説も行なわれたが、実は、1890年代初期の労働者の戦闘的攻勢が1870年代以来の植民地政府による進歩的立法措置への趨勢を一時中断させ、労働者の運動が革命的性質のものでないと判明した後に、1895年以降に再び以前の政策が継続されたとするローソンの考え方は正しいと思われる⁽⁷¹⁾。オーストラリアの賃金裁定は賃金稼得者の生活水準の保護を第一の目的としたというのが、オーストラリアの消費水準を研究したニムモの言葉である⁽⁷²⁾。19世紀後

(69) Russel Ward, *Australia, A Short History*, pp. 70-1.

Manning Clark, *op. cit.*, p. 147.

Ken Buckley and Ted Wheelwright, *op. cit.*, pp. 114-5.

(70) Russel Ward, *Australia, A Short History*, p. 78.

(71) R. Lawson, *op. cit.*, pp. 355-6.

(72) J. F. Nimmo, 'The Australian Consumption Standard', in F. W. Eggleston, E. R. Walker, G. Anderson, J. F. Nimmo (eds.), *op. cit.*, p. 169.

期以降のオーストラリアは資本主義社会としては支配階級が被支配階級の生活に手厚い配慮を行なってきたと言えよう。そこに展開された労働運動が階級闘争的でも革命的でもなく、大多数の一般組合員が組合活動に関心をもたないという状況を呈するのも故なしとしないのである⁽⁷³⁾。

以上みてきたところによると、「パラダイス」という比喻の妥当性はともかくとして、19世紀後半のオーストラリアの社会が労働者にとって同時期のイギリスの社会より、若干は居心地のよい社会であったことは否定できない事実であったと思われるのである。

(73) Ross M. Martin, *Trade Union in Australia* (Penguin Books 1980)
堀武昭訳『オーストラリアの労働組合』(勁草書房 1986年), p. 116.